私達の職場 10

漁港を守り育てる男たち

青森県には，陸奥湾をはさんで西に津軽，東に下北の２つの半島があり，現在津軽半島の竜飛崎では世界の注目をあびつつ青函トンネルの掘削が着々と進められている。

他方，下北半島は通称「まさかり」と呼ばれ，恐山を中心とするわずかな観光地が点在する程度であるがむつ小川原開発と，最近大湊湾における原子力船「むつ」の問題で脚光をあびたのは記憶に新しい。

今回の訪問先の青森県下北地方漁港事務所は，下北半島の漁港群の管理・維持・建設等を行っているところで，同じ土木の仕事のうちでも青函トンネルに比べ規模といい，工事金額といい比較にならないほど地味な仕事であろう。しかし，土木事業がいかに地域の人びとに暖く受け入れられているか，という技術の原点の見本としてとらえてみた次第である。

「藩政時代の名残りで本県は津軽地方と南部地方に分けることができます」小雨降る国道279号線（はまなすライン，昭和 42 年完全舗装）を，左手に陸奥湾を望みながら，むつ市に向かう車の中で田所建設第一課長がおだやかに語りかける。

「津軽と南部は，気候，産物また住んでいる人の気質も違い，対抗意識はかなり強いものをもっています。また，本県の産業は昭和 48 年の統計では，農業，水産業，林業の順で，農産物をみてみますと津軽地方は米とリンゴ，南部地方は畑作とはっきり区別されます。漁業は，全県で水揚げが62万トン強，沿岸，近海，遠洋で，サバ，スケソウダラ，イカが主要なもので，下北ではイカが多いようです。また，陸奥湾の沿岸漁業は一時先細りの状態でしたが，近年ホタテ貝の養殖が盛んになりました。昭和 49 年度で３万トンの水揚げです。これも業者が増えたうえに，密殖の弊害等いろいろな問題が出てきているようですね。浄化施設がないので養殖で汚れる一方の海も頭の痛いことです」。

野辺地から車にゆられること１時間，下北半島を北上し，ちょうど「まさかり」の付根にあたる位置にある，むつ市に到着した。

正式名称である青森県水産商工部漁港課下北地方漁港事務所は，県の他の出先事務所といっしょに，合同庁舎の二階の一角に，小じんまりとまとまっていた。

「私はこの４月に土木事務所から転勤してきたばかりであまりよくわかりませんので，課長さんたちに聞いて下さい」と鈴木俊一所長が，所長室に集まった，建設第一課の田所政広課長，横山　晃主任，建設第二課の伊勢田高一課長，高杉　弘技師を前に，笑いながら口を開いた。伊勢田課長も４月の着任組ということなので，ここではもっぱら田所課長が主な回答役となる。

「青森県には漁港事務所が東青（青森市），三八（八戸市），西北（鯵ケ沢町），下北（むつ市）の４つありま

大畑漁港ケーソンヤードにて
（左より 田所課長，武並，野村（大豊建設）福士，横山，山本の各氏）

す。この4か所で県内の海岸延長681キロに点在する大小80の漁港を管理しておりますが，当事務所は下北半島に点在する35の漁港（県内の43.8%）を受け持っています。その海岸延長は280キロ（県内の41.1%），恐らく一つの事務所が担当する量としては全国的にも有数のものでしょうね」

これらの維持・管理・建設を鈴木所長以下総務課，建設第一課（佐井村，大間町，風間浦，大畑町，むつ市），建設第二課（脇野沢村，川内町，東通村，六ケ所村，横浜町）の3課21名（平均年令36才）の職員によって運営されているという。

各県とも漁港を担当する土木屋さんは土木部に属していないためあまり目立たないようであるが，その仕事量はかなり多い。

ここ青森県でも土木部，農林部，水産商工部の3部に分かれている。役付で3年，他の人で5年程度の周期で転勤があるので，各部の交流も多く仕事の面で非常にプラスになっているようである。

現在県内の第5次漁港整備5か年計画を実施中で，総予算380億円のうち，この事務所は120億円で，本年度は19億7000万円を消化する予定と聞いた。

一般港湾工事と漁港工事の違いを問うと，「基本的にあまり違いはないのですが，条件的には漁港のほうが厳しいのではないでしょうか？」といい，「最近の土木工事は環境問題などで住民の反発が強い所が多いようですけど，この管内の漁港ではわれわれの仕事は大観迎されており，非常に協力的でやりがいがありますよ」と，まことにうらやましい返事が返ってきた。

仕事の上での悩みを聞いてみる。「現状および将来予測，および漁業の先行きを考えて工事計画をたて，作業を進めていくのですが，予算が細かいので完成した時点で予測を上回り後追い行政になってしまうので，常に不満足の状態で仕事をしなければならないことと，省力化が進めにくい事務や施工手続上の問題がありまして，技術上は可能でもなかなか省力化が図りにくい……まあこんな所が強いていえば悩みでしょうかね」と，余裕たっぷりの仕事ぶりとみた。

各漁港の現場事務所には，交代で泊り込んでいるのだろうという予想は，「いや朝ここから出かけて夕方またここにもどってきます。ここが現場事務所も兼ねているようなものですね」という意外な返事であった。

むつ市は下北半島の扇のかなめ的な位置にあり，車であれば尻屋崎まで1時間，大畑までは30分，最北の大間崎までても1時半ほどの距離と聞いてびっくり。本州の北端というイメージから距離感が浮かばなかったための錯覚であると気付いて恐縮する。

歓談の後，野性の馬が生息する尻屋崎燈台の近くにある尻屋漁港を，鈴木所長と高杉技師にご案内いただく。道の悪さは覚悟していたものの運転技術が十分にそのハンデを埋めてくれる。

崖下のわずかな浜に，漁港とは名ばかりの港であったろうと思われる同港は，太平洋の荒波から身を護るように浜に陸上げされ，身体を寄せあっている漁船群が，やがて港の完成とともに，防波堤でしっかり守られた静かな泊地に係留される姿を想像するにつけても所長室での「歓迎される工事」という言葉が実感としてわかってくる。

同現場で少し変わった消波ブロックがあったので，高杉技師に他のブロックとの比較を聞くと「県内に実験施設が少ないのでなんともいえませんが，どの消波ブロックも，そう性能は変わらないのでは……」というが，地方においてはこと実験に関してだけでもかなり不便をきたしているのであろう。

さらに田所課長にご案内いただいた大畑漁港は，下北事務所で唯一の第三種漁港で，ここの工事量が管内では一番大きい所という。ここにはケーソンヤードが作られ，他の漁港のケーソンも製作し送り出しているが，潮流，波浪の関係で曳航，沈設にはかなり苦労していた。

ケーソンヤードで若い福士さん，山本さんに休みには何をしていますかと聞くと，ニッコリ笑って「勉強しています」という優等生の答が返ってきた。「嘘をつくなよ」と周囲にひやかされながら照れる二人に純朴な清々しい東北の青年の姿をみた。

本州の北のはずれ下北半島の漁港を守る人たちの環境はたしかに厳しい。冬になればなおさらであろう。しかし一歩一歩確実に漁民の生活の場を整備してゆく姿は，大湊港に係留されている原子力船「むつ」のさびしげな船影をみるにつけても，地元漁民から全幅の信頼をかち得ることであろう。

日本の漁港

昭.50.8.1 現在

第一種	第二種	第三種	第四種	計
2 157	468	109	91	2 825

第一種：主として地元船が利用するもの
第二種：1種と3種の中間的なもの
第三種：主として全国の漁船が利用するもの
第四種：岬・離島等辺すうの地にあり避難する漁船が利用するもの

〔文・阿部登喜男　写真・河村忠男〕